学　　年	中１年	郡　市　名	刈　谷
提　案　者	刈谷市立富士松中学校		野々目将之

課題意識をもって歴史を追究する中学校社会科授業[1]
―刈谷市歴史博物館との博学連携を通して―

１　はじめに

本研究の目的は，地域の歴史を展示する歴史博物館と連携し，生徒が自ら課題意識をもって歴史を追究する中学校社会科授業を構想，実践し，その成果と課題を示すものである。

中学校の社会科歴史的分野の目標の一つとして，平成 29 年告示の新学習指導要領では，歴史に関わる諸事象について「課題を主体的に追究，解決しようとする態度を養う」ことが挙げられている。その上で，「現在に伝わる文化遺産を尊重しようとすることの大切さについての自覚」を涵養していくように求めている。これは，新学習指導要領の目指す３つの資質・能力の中でも「学びに向かう力・人間性等」を育成することにつながっているとしている[2]。これを受けて，「歴史との対話」の大項目では，「私たちと歴史」「身近な地域の歴史」の２つの中項目の学習を通して，「課題意識をもって歴史を追究し学ぶことの大切さに気付くことができるようにする」ことを求めている。特に「身近な地域の歴史」の中項目では，地域の歴史を取り扱っている博物館や郷土資料館の活用も考慮するように求められており，中学校と博物館との連携（以後：博学連携）を模索していく必要性があることが分かる[3]。また，歴史的分野の学習の導入として，生徒が，過去を継承しつつ，現在に生きる自身の視点から歴史に問いかけ，主体的に課題を追究する態度を養うことをねらいとしている[4]。

生徒が現在に生きる自身の視点から歴史に問いかけるためには，問いかける歴史的事象が生徒の目の前に存在する必要があり，生徒の問いかけに答える存在も必要となる。「身近な地域の歴史」をたどることで，問いかける対象となる歴史的事象に出会うことが可能となり，地域の歴史博物館や郷土資料館を活用することで，生徒の問いかけに答えることができる学芸員に出会うことができる。交通手段・予算などの物理的な要因や時間的な要因もあり，博物館の利用は積極的に行われているとは言い難いが，博物館での学習が学習意欲を向上させることは，博学連携に関する多くの研究によってすでに明らかにされている。

そこで，本研究では，歴史博物館と連携し，生徒が自ら課題意識をもって地域の文化遺産について追究する授業を構想し，実践することにした。生徒が自らの課題意識をもってそれを追究していく中で，課題解決の力や文化遺産への関心が高まり，博物館を活用することで学習が深まるのではないかと考えたからである。本研究では，この授業の分析を通して，生徒が自ら課題意識をもって歴史を追究する社会科授業の在り方を示していきたい。

２　刈谷市の歴史博物館と授業プランの構想

（１）刈谷市歴史博物館について

刈谷市歴史博物館（以下：歴博）は平成31年３月にオープンした。刈谷市の遺跡や遺物が展示され，「刈谷の縄文時代」「刈谷藩と城下町」「刈谷発の近代化」の３つのテーマの常設コーナーと刈谷市の祭礼を取り上げた，「おまつり広場」がある。オープンに合わせて，刈谷市では市内６中学校の見学事業をスタートし，中学校１年生全員を対象に，学校ごとに見学ができるようにした。見学時期は５～６月であり，歴史学習の導入時期～縄文時代の学習を進めている頃である。全国的に数が少ないと言われている中学校の見学事業が始まり，歴博としてはその活用方法を模索しており，主体的に見学に臨めるようなプログラムを開発しようとしている。

（２）先行研究より

自ら課題意識をもち，それを追究していくためには，問題解決学習の手法を取り入れる必要がある。問題解決学習は「独自学習」と「相互学習」の二つの学習活動の過程を柱に構成され，その二つが連続しながら学習が展開されていくべきものである[5]。本研究の授業実践の際には，「相互学習」について，学級の仲間との学習に加えて，学芸員の話を聞き取ることや学芸員への質問など，学芸員との双方向のやり取りも含むこととした。

宮下（2012）は博学連携の際の重要なポイントとして「生徒の身近にある地域史と全体史との共通点を発見することや相違点を見つけ出すことなどを通じて考察することで，歴史学習が身近になるような工夫が必要」と述べ，地域史と全体史との比較の必要性を指摘している[6]。初澤(2017)は「（博学の）

連携を深めていくためには相互理解の深化が不可欠であり，共同研究なども含めて交流を進めていくことが必要」と述べ，お互いのニーズを満たす教育プログラム等を研究開発していく必要性を指摘している(7)。

これらのことを踏まえ，事前指導・見学プログラム・事後のまとめの３段階で単元を構想することにした。その際にそれぞれの授業場面で必要な手だてを資料１にまとめた。

資料１　歴博の見学を中核に据えた授業実践に必要な手だて

事前指導	見学プログラム	事後のまとめ
・見学に向けての事前準備の必要性を，館長から生徒たちに伝える場面を設定する。(相) ・生徒が全体史と地域史とをつなげて考えられる場面を設定する。(相) ・見学を通して分かることと聞かなければ分からないことを考え共有する時間を設定する。(相) ・展示内容や「私たちの郷土」(副読本)，全体史の確認などを通して，それぞれの時代の刈谷がどのような様子だったのかについて目を向けさせ，博物館見学で明らかにしたい課題をもてるように支援する。(独)	・生徒の関心に合わせたグループ編成を行う。(独) ・生徒が聞きたいことを一覧表にまとめ，歴博の学芸員と共有する。(独) ・事前指導で生徒が考えた歴博で聞きたいことを，歴博の学芸員に質問できる時間を設定する。(相)	・歴博で学んだことを中心に，見学レポートを書く時間を設定する。(独) ・まとめの中で，歴博を見学した価値を考え，表現させることで，自己の成長を実感させる。(独)

＊独自学習に関わる手だてには（独），相互学習に関わる手だてには（相）を示す。

（３）見学プログラムについて

歴博の展示内容に合わせて，４つのコースを設定した。コースの設定には，歴博の指導主事と相談した。それぞれのコースの概要について資料２に示す。

資料２　見学プログラムで設定した４つのコース

見学 コース名	原始・古代 ～刈谷の遺跡～	近世 ～武士・刈谷城～	近代・現代 ～刈谷の発展～	祭礼 ～万燈・雨乞いに込められた願い～
内容	①体験・講義 「刈谷市の遺跡」 ②質疑応答 ③常設展示の見学（縄文を中心に） ④バックヤード見学	①講義 「刈谷城について」 ②質疑応答 ③亀城公園（刈谷城址）散策・解説 ④常設展示の見学	①石田退三記念館の見学・解説 ②質疑応答 ③常設展示の見学・解説（近代を中心に）	①常設展示見学・解説・体験（お祭りひろばを中心に） ②講義「刈谷市の祭礼」 ③質疑応答 ④常設展示の見学

３　授業の実際及び考察

（１）単元構想

第１時　　歴史博物館ってどんなところだろう。
第２時　　歴史博物館の見学に向けて，小学校の歴史学習を振り返り，時代区分を確認しよう。
第３時　　小学校の歴史学習で最も印象に残っていることと刈谷の歴史をリンクさせ，博物館で見たい展示品を探そう。
第４時　　それぞれの時代の刈谷はどんな様子だったのだろうかを博物館で調べるための課題を作ろう。
第５・６時　課題が明らかになるような見学にしよう。
第７・８時　見学レポートを作ろう。

（２）生徒Ａについて

本研究では，生徒Ａの記述や発言，行動を分析することで，単元の成果と課題を示す。生徒Ａは社会科の調べ学習に丁寧に取り組むことができ，文章もきちんと書ける。物怖じしない性格で，発言も積極的にできる。授業を通して，自分が調べたいものを見つけ，学芸員に質問するなど，主体的な学習を期待している。

（３）歴博の見学に興味を示す生徒Ａ －第１時の分析より－

単元の導入として，歴博の見学に向けて，事前準備への意欲を高めることをねらい，歴博の館長からのビデオレターを視聴した。その中で，館長より「刈谷の歴史について調べてから見学に来てほしい」「学芸員から話を聞いたり，質問をしたりすることができるから，課題をもって見学に来てほしい」と

２つの課題を与えられた。その上で，歴博の常設展示と見学プログラムの４つのコースについて，説明をした。

資料３　第１時の生徒Ａの授業感想（６月５日　生徒Ａの授業ノートより作成）

刈谷の歴史についてしっかりと学べるので，それまでにできるだけ勉強をして少しでも身に付けてから行きたいです。

資料３は第１時の生徒Ａの授業感想である。「刈谷の歴史についてしっかりと学べる」と，歴博の見学を通して，郷土の歴史に触れられる機会に興味をもった生徒Ａの様子がうかがえる。

その上で，「それまでにできるだけ勉強をして少しでも身に付けてから行きたい」と，館長からのビデオレターに生徒Ａが素直に反応し，地域の歴史の学習に対し前向きに取り組もうとしていることが分かる。しかし，見学の際に何を見たいのかなど具体的な言葉は一つも見られない。これは生徒Ａが歴博で見たいことが明確になっていないことに加え，見学プログラムの４コースについても十分に理解をできていないことを示していると考えられる。

このことから，歴博の館長からのビデオレターを視聴することで歴博見学に向けての課題を与えるという手法は，生徒が歴博を見学してみたいという，動機付けになっていることがうかがえるものの，その意欲は具体的ではなく，さらなる動機付けの必要性を示唆している。

（４）郷土の歴史に引きつけられる生徒Ａ －第２・３時の分析より－

生徒が４つの見学プログラムについて，それぞれどのような時代背景があるのかを明確に理解するためには，小学校の歴史学習の内容を振り返り，それぞれの時代を大観させる必要があると感じた。そこで，第２時では小学校で学習した内容をブレインストーミングで発表させ既習事項を共有した。その後，見学プログラムを選択する際に，生徒自身の関心がある時代を明確にするために，小学校の歴史学習で最も印象に残っている事柄について，短冊に書かせた。

生徒Ａは「卑弥呼」と書き，その理由を「神の声を聞けるなんてあり得ないけれども，すごいと思った」と書いた。卑弥呼を選択したことから，生徒Ａは古代史について，関心がある事が分かった。そこで，第３時には，生徒の関心を地域史にまで広げていくことをねらい，生徒の印象に残っている事柄や全体史で活躍した人物の写真と４つの見学プログラムの中で学ぶことができる，刈谷市の文化遺産や偉人などについて概説しながら，写真を黒板に配置し，年表を作成した（資料４）その上で，見学プログラムの希望調査を実施した。

資料４　第３時の板書写真（６月１１日撮影）

資料５　第３時の生徒Ａの授業感想（６月１１日の生徒Ａの授業ノートより作成）

見学希望コース：原始・古代～刈谷の遺跡～ 私の家の近くで昔食器が作られていたなんて知らなかったので，驚きです。他にも刈谷市には芋川遺跡など，古代からのいろいろなものもあるのでもっと知りたいです。

資料５はその時の生徒Ａのノートである。生徒Ａは「原始・古代」のコースを選択した。その上で，「私の家の近くで昔食器が作られていたなんて知らなかったので，驚き」と刈谷市北部にある井ヶ谷古窯（猿投古窯群の一部）が自分の家からさほど遠くない距離に存在することを知らなかったＡは，その事実に驚き，興味を引かれていることが伝わってくる。その上で，刈谷市北部にある遺跡の名前を具体的に挙げつつ，「もっと知りたい」と書いている。「もっと」という表現からは，自分の知らなかった地域の歴史を詳しく調べ，どのような遺跡や遺物，偉人などがあるのか見つけていきたいという意気込みが感じられる。

これらのことから，小学校の歴史学習で最も印象に残っている事柄を選ばせることは，生徒自身の興

味のある時代を明確にすることができるといえる。その上で，全体史と地域史とをつなげて考えられる場面を設定することで，生徒が関心のある時代の地域の文化遺産に注目させることができ，生徒の追究意欲をかき立てることが分かる。しかし，それぞれの遺跡等の知識は浅く，その背景や歴史的価値を理解できていないことは明らかである。地域史について調べ，歴博で何を明らかにするべきなのかを考えさせなければ，歴博の見学で明らかにしたい課題を作ることはできないことが分かる。

（５）歴博で明らかにしたい課題をつくる生徒Ａ －第４時の分析より－

前時の生徒Ａの姿を受けて，地域史について学ぶ副読本「わたしたちの郷土」[8]（以後：副読本）を利用して調べる独自学習の時間を設定した。授業時間ではなく，朝の読書時間を活用することで効率よく学習に取り組めるように配慮した。生徒Ａは関心のある古代だけではなく，幅広い時代の遺跡や偉人について，学習をした。その中で生徒Ａは，「野田の雨乞い」に関心をもつようになり，教師に見学プログラムのコースを「原始・古代」から「祭礼」に変更したいと申し出た。副読本を用いて，それぞれの遺跡等の内容や歴史的価値に触れたことで，生徒の興味が移り変わっていったと推測できる。そこで，第４時は学習課題を「それぞれの時代の刈谷の様子や人々の暮らしについて，見学で調べるための課題を作ろう」とし，歴博で何を見聞きしたいのかを明らかにする時間を設定した。授業の前半で，生徒が主体的な見学につながる課題を作れるようになることをねらい，見学の中で展示物や説明書きを見て分かることと学芸員に聞かなければ分からないことを考えさせる時間を設定した。その際に，刈谷城を事例にし，仲間の考えを全体で共有できるように配慮した。その時に生徒が考えた内容を資料６にまとめた。

資料６　生徒が考えた、見て分かることと聞かなければ分からないこと

（６月１３日の授業記録より作成）

展示物や説明書きを見て分かること	学芸員に聞かなければ分からないこと
・城の周りにある物や立地　　・城の構造や工夫 ・城の広さ，大きさ，高さなど　・土地の形 ・人々の暮らし　　・城下町の風景	・外見からは分からない，城の中の工夫 ・刈谷城を作るのに何人の人が関わったのか ・なぜ天守閣がないのか。 ・何人の人が暮らしていて，どんな役割があったのか

生徒たちは刈谷城の展示は大きなジオラマになっているため，見て分かることとして「城の構造や工夫」，「大きさ」など外見から分かることを挙げた。それに対し，「なぜ天守閣がないのか」「どんな役割があったのか」など，他の地域との比較や，その理由，人々の暮らしぶりや役割のような細かな点は学芸員に聞かなければ分からない可能性があると発言した。これにより，生徒たちは，聞かなければ分からないこととはどのような質問なのかを共有した。その後，副読本や歴博のパンフレットを用いて，生徒が歴博見学で明らかにしたい課題を考える独自学習の時間を設定した。

資料７　生徒Ａの独自学習の内容と，学芸員に聞いてみたいこと

（６月１３日の生徒Ａの授業ノートより作成）

独自学習の内容	学芸員に聞いてみたいこと
○野田八幡宮 676 年に建てられたと伝えられている。 八幡大神（応神天皇）（略）を祀っている。 刈谷市内で１番位が高い。 江戸時代から信仰があつい。水野勝成の「総髪兜」などが代々祀られていて，守られている。 ○雨乞い笠おどり 貧しい農民たちの願いが込められている。 ほら貝，つづろ，太鼓，笠おどりに使う棒	○だれが，なぜ雨乞い笠おどりをはじめたのか。 ○なぜつづろでたたくのか ＊つづろ：祭礼で使用する太鼓をたたくためのバチの名前。和太鼓用のバチとはことなり，拍子木のような形をしているのが特徴。 ○なぜ笠をかぶるのか

生徒Ａは見学プログラムの中から「祭礼」を選択した。独自学習の中で副読本を使って「野田八幡宮」[9]と「雨乞い笠おどり」[10]について調べ，分かったことをまとめることができた。その上で，学芸員に聞いてみたいことを３つ書いた（資料７）。「だれが，なぜ雨乞い笠おどりをはじめたのか」と雨乞い笠おどりの起源について気になっている生徒Ａの様子がうかがえる。さらに，「つづろ」「笠」と雨乞い笠おどりで使用される独特な道具について関心をもった。雨乞いの起源やこれらの道具がどのような意味をもつのかについては，副読本には紹介されておらず，学芸員に聞かなければ分からない可能性のある質問である。これは授業の前半で，学芸員に聞かなければ分からないことを学級全体で考え，共有した手だてが有効に作用したと考えられる。また，副読本などを通して独自学習に取り組ませたことで，す

でに分かっていることと，まだ分かっていないことを意識でき，見学を通して聞きたいことや学びたいことが明確になったと考えられる。

（６）見学の中で学芸員に質問し，自らの課題を解決する生徒Ａ －第５・６時の分析より－

生徒Ａは祭礼のプログラムに参加した（資料２参照）。資料８はその際の見学メモの中から，生徒Ａが関心をもっていた雨乞い笠おどりに関わる部分を抜粋したものである。

資料８　見学メモ（６月１４日の生徒Ａの授業ノートより作成）

＜雨乞い笠おどり＞
８月下旬に行われる。ふつうのバチは 36ｃｍだけど，つづろは 16cm で，太さは倍
衣装…一文字笠・浴衣・赤だすき　　指定…刈谷市指定無形民俗文化財
道具…ほら貝・桶同太鼓・つづろ・采配
昭和１７年に途絶える　→　昭和 54 年ごろに復活　（以前に）やっていた人が生きているから（復活できた）！
Ｑなぜ雨乞いはその衣装なのか？
Ａ当時の人の服　…　いいものが着られなかった　→　浴衣を着る。笠も農作業の時に使っていた。
　つまり，普段の服ということ！

「つづろは 16cm で，太さは倍」や「昭和 54 年ごろに復活…やっていた人が生きているから」と見学のメモを残していることから，聞きたかった内容に沿って見学を進めていることが分かる。衣装や道具についても記入していることからも，学芸員の説明や展示内容を書き写しているのではなく，生徒Ａがもつ課題を明らかにするために情報を取捨選択している生徒Ａの様子がうかがえる。さらに，学芸員に「なぜ雨乞いはその衣装なのか」と質問をしている。事前に聞きたいと考えていた笠のことだけではなく，学芸員から衣装についての説明を受けて，その衣装を着ている理由について新たな関心をもち，質問したことが分かる。「いいものが着られなかった→浴衣」「つまり，普段の服ということ！」と学芸員から聞き取った内容をまとめた。前時の独自学習で捉えた江戸時代のまずしい農民の姿とつなげて考えていることが分かる。特に「つまり」という言葉には，生徒Ａが学芸員の解説に納得をした様子が伝わってくる。これらの姿は生徒Ａが主体的に見学に臨み，自らの課題を解決した姿であり，前時までの４時間に講じてきた手だてや学芸員への質疑応答の時間を設定したことが有効に作用した結果だと考えられる。

（７）課題を解決し，学びに満足感を得る生徒Ａ －第７・８時の分析より－

単元の終末に見学内容をレポートにまとめる時間を設定した。書く内容は，事前指導や見学プログラムを通して学んだことや考えたことをまとめるのと同時に，この単元の学習を通して得られた自分自身の成長にも言及するように指示を出した。これにより，自分たちが住む身近な地域の文化財に愛着を感じ，歴史を学ぶことのよさを実感する姿が表出すると考えた。

資料９　見学レポート（６月１９日生徒Ａの授業ノートより作成）

私は今回，お祭りについて調べたり，お話しを聞いたりしたけど，こういう授業を通して，刈谷のいろんなところが知れて，この見学で大切さを実感しました。刈谷市だからこそのお祭りや，古代のいろいろな遺跡，近世，近代の発展が詳しく歴史博物館に行ったからこその習得（学び）だと思うので，本当に行けてよかったです。

資料９は見学レポートの自分自身の成長に関わる部分を抜粋したものである。生徒Ａは「お祭りについて調べたり，お話を聞いたりした」と単元を振り返り，「刈谷のいろんなところが知れて」と書き，４時間の事前指導を通して見学で聞きたいことを明らかにした上で，見学プログラムを行ったことで，生徒Ａのもっていた課題が解決され刈谷市の祭礼に対する知識が深まったことが読み取れる。そして，「大切さを実感」と，雨乞い笠おどりをはじめ，見学プログラムを通して学んだ刈谷市の祭礼が，当時に生きる人々の生活に根ざしたものだと知り，その歴史的価値を実感したと推測できる。これは，生徒Ａが郷土の歴史に愛着を感じ，誇りをもっている姿だといえよう。

その上で，「刈谷市だからこそ…歴史博物館に行ったからこその習得（学び）」と歴史博物館に行ったことにより，生徒Ａ自身の課題が解決され，深く学べたことを実感している様子が読み取れる。特に「こそ」からは課題の解決に，歴博の見学が欠かせないものであったという実感が込められており，その上で「本当に行けてよかった」と書いたことからも，課題を解決できたことに対する満足感を得ている様子が伝わってくる。

このことから，学んだことを見学レポートにまとめることで，生徒が自分の課題に対する答えを明確にすることができ，地域の文化遺産を大切にする気持ちが育まれることが分かる。また，課題を解決できた成功体験が，生徒の学びに対する満足感が高まることにつながり，課題解決の力として蓄積されていくと考えられる。

４．終わりに

本稿で示した単元は事前指導・見学プログラム・事後のまとめの３段階で構想し，「独自学習」と「相互学習」を組み込んだ問題解決的な学習を取り入れた。その中で，歴博で学芸員に聞かなければ分からない課題を考えさせた。生徒の課題解決を支えられるように，歴博に生徒の聞きたいことを事前に伝え，見学プログラムの中に質疑応答の時間を設定するなどの連携を行った。新学習指導要領の完全実施を見据え，これから博学連携の必要性が増していく状況にあって執筆を行った本稿の成果と課題は次の通りである。

（１）成果

第１に，博学連携をする中で，事前指導・見学プログラム・見学のまとめの３段階で単元を構想し，「独自学習」と「相互学習」を組み入れた問題解決的な学習を取り入れる手だては，文化遺産を尊重しようとする態度を育むのに有効であったことを明らかにした。問題解決的な学習を取り入れた生徒Ａの姿からは，地域の文化遺産である祭礼に関心をもち，それについて調べたり，見学を通して学んだりする中で，文化遺産が大切なものであると実感することができたといえる（資料９参照）。このような学習経験が積み重なることで学習指導要領が求めている，「現在に伝わる文化遺産を尊重しようとすることの大切さについての自覚」を涵養することにつながっていくと考えられる。

第２に，学芸員に聞きたいことを聞ける時間の設定は主体的な見学を可能にし，生徒の課題解決の力を育むのに有効であったことを明らかにした。本稿で示した実践にとっては，歴博との連携は欠かせないものだった。特に学芸員への質疑応答の時間を設定したことは，生徒が主体的に課題解決をするのに有効だった。特に，見学と説明だけでは解決しきれなかった課題を聞くことができる時間が確保されていたことで，課題を解決できる成功体験につながった。このような授業を続けていくことで，課題意識をもって歴史を追究し学ぶことの大切さに気付くことができ，生徒の課題解決の力が育まれていくと考える。これらのことは，生徒が課題意識をもって見学に臨み，学芸員に質問できる時間を確保することで，課題意識をもって歴史を追究する中学校社会の授業になり得ることを示唆している。

（２）課題

歴史博物館との連携には時間がかかる。これを授業時間外に行うことになるため，労力もかかる。この時間と労力を生み出す工夫については本稿では触れられなかった。また，歴博側の授業に対する理解や相談のしやすさも影響してくる。本稿に掲載した授業実践では歴博の指導主事がコーディネーターの役割を果たした。博物館や学芸員と授業者とを結ぶ，人材の確保は必要である。このようなコーディネーターに求められる役割についても本稿では触れていない。

多くの事例研究を進める中で，博学連携のパターンを類型化し，コーディネーターに求められる役割を見いだしていきたい。

【注・引用文献】

(1)本稿は野々目将之・真島聖子(2019)「課題意識をもって歴史を追究する中学校社会科授業―刈谷市歴史博物館との博学連携を通して―」『探究』(愛知教育大学社会科教育学会）第 30 号 pp.9-16 に掲載されている論文を引用・修正している。
(2)文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説 社会編』pp.86
(3)同上 p.91
(4)同上 p.90。
(5)藤井千春『子どもが蘇る課題解決学習の授業原理』明治図書 p.86
(6)宮下貴光「中学校社会科歴史的分野における博物館との連携に基づく授業開発」
http://hdl.handle.net/10132/7172,2012,pp.1-2
(7)初澤敏生「北海道・東北地方における地域博物館と学校との連携活動に関する調査報告」
『福島大学地域創造』第 28 巻第２号,2017,pp.100-106
(8)『わたしたちの郷土～刈谷歴史伝～』刈谷市教育委員会,2018
(9)野田八幡宮：刈谷市野田町にある神社。江戸時代から続く雨乞い笠おどりが毎年奉納されていることで有名。
(10)雨乞い笠おどり：刈谷市無形民俗文化財に指定されている祭礼。江戸時代に始まり，現在は野田雨乞笠おどり保存会によって，毎年奉納されている。